

簡易猿害防止柵「猿落君」改良型の開発

「猿落君（えんらくくん）」は、鳥獣害対策プロジェクトチームにより開発された簡易なサル侵入防止柵です。鉄パイプを骨格とし、グラスファイバー製の弾性ボール（商品名：ダンボール）を用い、サルよけネットを張ったものが基本構造です。ボールがしなることによりサルが柵を乗り越えにくく、乗り越えを学習したとしても侵入・脱出に多くの時間を要することが特徴で、誰でも手軽に作るができます。

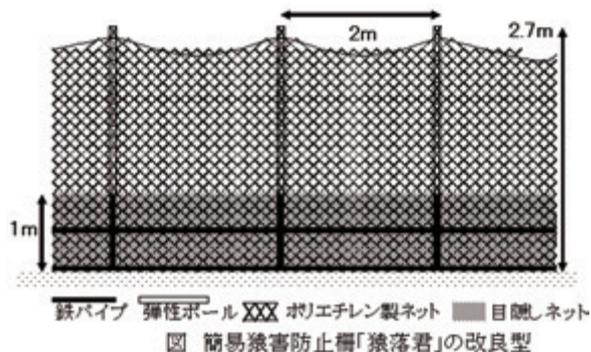
しかし、「猿落君」の設置圃場では、柵内がほぼ見通せるためサルが警戒心を抱きにくい、ナイロン製テグスネットの劣化が早い等の問題が、現地調査により明らかとなりました。そこで、ネット資材の改良および柵馴れへの対策を検討しました。

改良資材を用いた改良型「猿落君」の効果

- 追い払いとの相乗効果で持続的な侵入防止 -

五條市大塔町の2圃場に改良型「猿落君」を設置しました（図、写真）。目隠しネットは遮光率約80%で、柵の下部1m幅で設置することによりサルが目線では中が見えにくくなります。今まで躊躇せず侵入を試みていたサルが、目隠しネット設置後は周囲をうろろしてなかなか入ろうとしない等の行動に変化が現れ、サルの警戒心が増していることが明らかになりました。ポリエチレン製ネット（商品名：「猿遠くん」(株)ネクスタ製）は従来のナイロン製テグスネットに比べて、サルの侵入し難さには大きな違いはなく、設置後3年経過しても実用上問題となる劣化がみられず、コストも同等であることから、代替素材として適していると思われました。

両圃場周辺では園主等による追い払い（ロケツ



ト花火使用）が日常的に行われており、サルが畑に近づきにくい状況が作られています。そのため、サルが改良型「猿落君」に馴れる時間は少なく、攻略できるサルが限られた状態を維持できています。したがって、改良型「猿落君」への侵入頻度は柵無設置の場合の1/5未満であり、農作物被害も大きく軽減できています。

「猿落君」への馴れが著しく進行した事例

- 「柵」だけでは守れない -

東吉野村のC圃場では、以前からサルの「猿落君」への馴れが進み、柵の乗り越えが容易な個体が増えていました。そこで、簡易ネット柵の外側を改良型「猿落君」で囲み二重柵の構造を作りました。通常のサルに対してははかなり複雑な構造になるのですが、柵に対する警戒心が失われた個体に対しては効果がほとんど無く、甚大な被害が発生しました。「柵馴れ」が進んでしまった原因は、プレッシャー（心理的障壁）がほとんどなくサルに豊富な学習時間が与えられたことです。C圃場周辺では、追い払いはほとんど実施されておらず、畑がサルにとって安全な場所となってしまう、結果として長い場合は1時間以上も畑に滞在し、柵の攻略方法を存分に学習できるという状態に陥ったのです。

防護柵は取り組みやすい対策ですが、今回の結果からも明らかなように、追い払いや集落の環境改善を同時に進めていかないと効果の持続は望めないことを認識する必要があります。



写真 改良型「猿落君」の設置状況（大塔町）

（栽培管理チーム 藤田博之）